

YGTからみた本校生徒の実態

新潟県立五泉商業高等学校教諭 松 崎 清

I 目 的

高校教育の多様化，一般化は教育の機会均等，教育水準向上の立場からよろこばしい現象であるが，反面，低学力生徒の入学増加，非行，問題行動の増加等一般化にともなう弊害も多く，現場における生徒指導の悩みは大きい。殊に昨今の高等学校における生徒指導はやゝもすれば一貫した指導体制を欠き，消極的な非行対策，対症療法的指導に力がそゝがれ，人間関係の改善，促進を通して社会的資質を高めようとする生徒指導本来の機能が指導面にじゅうぶん発揮されていないのが実情である。こうした現状打開の一方法として標準化された心理検査を指導面に活用し，生徒指導の有機化，機能化を図りたい。

一般に標準心理検査は生徒理解を深める補助的資料として，生徒の日常観察，諸調査と合わせて個別指導に利用されるべきものであるが，全生徒に実施し生徒の一般的心理傾向や生活実態を把握し，指導計画立案の参考に資することは可能であろう。この研究では，特に標準心理検査として，「矢田部ギルフォード性格検査」（以下YGTと記す）を用い，次の二点を究明し，その結果を生徒理解を基盤とする指導体制の確立，改善，指導目標の明確化に役立てようとするものである。

(1) 生徒の実態に即した指導計画を立案し，生徒指導を機能化するためYGTにより性格特性の一般的傾向とその問題点を把握する。

(2) 男女間には性格特性でなんらかの相違があるであろう，その相違点を把握することにより，それぞれの特性を生かした指導体制を考え，男女共学の意義を深める。

II 方 法

当校生徒，1年生（男124名，女172名）296名を対象にYGTを実施。（昭42.6.28実施）

- (1) 検査結果を類型別，特性別に比較検討し，一般的心理傾向とその問題点を把握する。
- (2) 男女別の性格特性を比較し，その差異について分析，検討する。
- (3) 一般的心理傾向とその問題点から，生徒指導における指導上の留意点を考察する。

III 内 容

1. 検査結果と考察

表1はYGTによる性格類型男女別比較で，生徒の類型分布と男女間の差異について調べたものである。類型面では，A型（平均型）の生徒が多く，C型（安定消極型）が比較的少ないが，不安定，不適応傾向を持つといわれるB型（不安定不適応積極型），E型（不安定不適応消極型）に属

する生徒が41.2%（男56名，女66名）を占め，全体的に情緒不安定，社会不適応の傾向を持つ生徒が多いといえる。男女間の差異についてはD型（安定適応積極型）をのぞいてはいずれも差はなく，男女共ほゞ同一の類型分布を示している。

最も差のあるD型については X^2 検定の結果，危険率5%で有意差が

みられ，

総体的に男子は女子に比較して理想的人格構造と云われるD型

の少ないことが認められる。

表2は性格特性についての男女別比較であり，また，表3はそのプロフィールである。標準点で男子は活動性が2の段階で他の標準点に比較して低く，また，女子との間にも差がみられるが粗点平均では殆んど変わりがなく，男女共に活動性に欠けることが感じられる。粗点平均で男女間に比較的差のある性格特性はCoとTで統計的有意差を X^2 検定によって確めたが，それぞれ， $X^2_o = 1.76$ ， $X^2_o = 0.58$ でいずれも有意差は認められなかった。しかし，粗点平均からみて男子は社会適応性，特に非協調性で，女子は思考的内向性でそれぞれ問題のあることが推察される。そこで，

表1 性格類型

数字は実数，()内は%

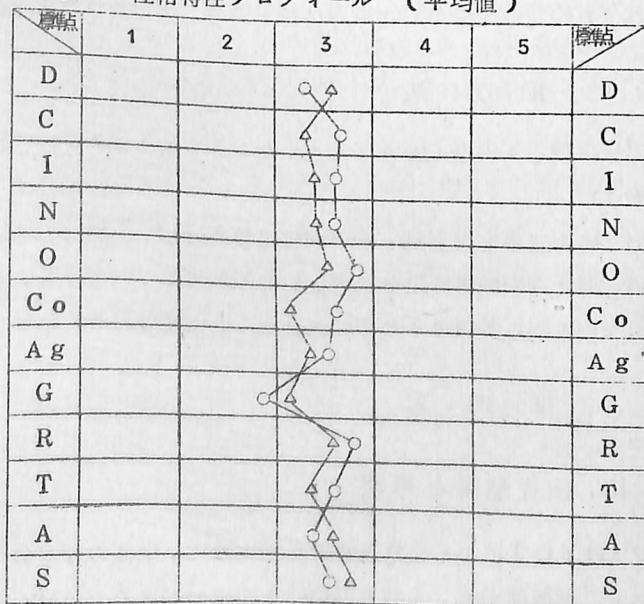
性別 \ 類型	A	B	C	D	E	計
男	35 (282)	29 (234)	15 (121)	18 (145)	27 (218)	124 (100)
女	47 (273)	34 (198)	24 (140)	35 (203)	32 (186)	172 (100)
計	82 (277)	63 (216)	39 (131)	53 (174)	59 (202)	296 (100)

表2 性格特性

数字は粗点平均，()内は標準段階

性別 \ 性格特性	情緒安定性				社会適応性			向性（衝動性，活動性，主導性）				
	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
男	102 (3)	108 (3)	103 (3)	99 (3)	89 (3)	101 (3)	112 (3)	88 (2)	125 (3)	109 (3)	85 (3)	109 (3)
女	117 (3)	105 (3)	111 (3)	101 (3)	88 (3)	83 (3)	101 (3)	95 (3)	112 (3)	98 (3)	92 (3)	112 (3)

表3 性格特性プロフィール（平均値）



○男子 △女子

これらの点をさらに深めるため性格特性を各質問項目によって調べたのが次の表4、表5の質問項目別性格特性である。

表4は各質問項目で生徒が肯定した頻度の最も多いものであり、表5はその頻度の少ないものである。表2に示された非活動性について、この調査からは「短い時間に沢山の仕事をする自信がない」「てきぱきと物

事をかたづけられな

い」「動作がにぶい

」等特に身体的な活

動性（動作性）に欠

けることがわかる。

また、この調査に

よる男女別比較では、

男子は「いろいろ違

う仕事をしてみたい

」「いろいろな世間

の活動がしてみたい

」と対外的活動、社

会的接触に対して深

い関心を示している

が、その反面「よく

考えずに行動してし

まうことが多い」

「平凡に暮らすより

何か変わったことが

したい」「早合点の

傾向がある」等思索

性に欠け、衝動的な

性格の内在于ている

ことを示している。

こうした男子の衝動

性は精神的に未発達

の高校生としては当

然考えられる青年期

特有の性格特性であ

るが、感受性の強い

表4 性格特性（質問項目別 ①） 数字は実数，（ ）内は%

領 域	質 問 項 目	男	女	計
情 緒 安 定 性	時々自分をつまらぬ人間だと思ふことがある	70 (565)	114 (663)	184 (622)
	たびたび物思いに沈むことがある	61 (492)	112 (65.1)	173 (584)
	たびたび過去の失敗をくよくよと考える	86 (69.3)	105 (61.0)	191 (64.5)
	たびたびゆううつになる	67 (54.0)	106 (61.6)	173 (58.8)
	時々気が散って考えがまとまらない	91 (73.4)	106 (61.6)	197 (66.6)
	なかなか決心がつかず機会を失うことが多い	48 (39.0)	92 (53.5)	140 (47.3)
	心配性である	82 (66.1)	114 (66.3)	196 (66.2)
	とてもありそうもないことを空想する	76 (61.3)	98 (57.0)	174 (58.8)
社 会 適 応 性	時々誰かに打ち明け話がしたい	52 (41.9)	101 (58.7)	153 (51.7)
	人がみていないと大ていの人はいなくなると思う	76 (61.2)	77 (44.8)	153 (51.7)
	平凡に暮らすより何か変わったことがしたい	69 (55.6)	74 (27.3)	116 (39.2)
	色々な世間の活動がしてみたい	76 (61.3)	78 (45.3)	154 (52.0)
性	色々違う仕事をしてみたい	82 (66.1)	97 (56.4)	179 (60.5)
	じっとおとなしくしているのが苦手である	64 (51.6)	66 (38.4)	130 (43.9)

年代であり、心理的変化、環境変化に左右されやすく、とかく自己統制を欠き非行、問題行動と結びつくことが多いので指導上じゅうぶん注意しなければならない。これに対して女子は「たびたび物思いに沈むことがある」「人中にいてもふとさびしくなることがある」等比較的抑うつ性が強く、「興奮するとじき涙が出る」「すぐ感情を傷つけられやすい」等回帰的傾向もみられ女性特有の繊細な感情がうかがわれる。

しかし、「たびたび考えこむことがある」「一人きりでいたいと思うことが時々ある」等男子に比較して孤独性（表2 思考的内向性の要因）が強く、思考的内向性を示している。殊に女子の場合孤独感は思考面ばかりでなく、行動面にも影響を与え、万事消極的な活動となって、正しい

向性（衝動性・活動性・主導性）		よく考えずに行動してしまうことが多い	83 (66.9)	46 (26.2)	129 (43.6)
		人といっしょにはしゃぐことが多い	81 (65.3)	98 (57.0)	179 (60.5)
		早合点の傾向がある	79 (63.7)	88 (51.2)	167 (56.4)
	T	一人きりでいたいと思うことが時々ある	59 (47.6)	92 (53.5)	151 (51.0)
		たびたび考えこむせがある	60 (48.4)	118 (68.6)	178 (60.1)
	A	自分で話すより人の話をきく方である	80 (64.5)	86 (50.0)	166 (56.1)
		人前で話すのは気がひける	72 (58.1)	94 (54.7)	166 (56.1)
	S	色々な人と知り合いになるのが楽しみである	98 (79.0)	129 (75.0)	227 (76.4)
		知らぬ人と話すときはかたくなる	87 (70.1)	128 (74.4)	215 (72.6)
		人と広くつきあうのが好きである	76 (61.3)	117 (68.2)	193 (65.2)

表5 性格特性（質問項目別 ②）

数字は実数，（ ）内は%

領域	質問項目	男	女	計
情 緒 安 定 性	C 興奮するとじき涙が出る	16 (12.9)	56 (32.6)	72 (24.3)
	I 人から邪魔にされはしないかと心配である じきうるたえるたちである	14 (11.3)	28 (16.3)	42 (14.2)
		22 (17.7)	21 (12.2)	43 (14.5)
	N すぐ感情を傷つけられやすい 人から見られているようで不安である	21 (16.9)	53 (30.8)	74 (25.0)
		5 (4.0)	29 (16.9)	34 (11.5)
	O わけもなく喜んだり悲しんだりする	8 (6.5)	11 (6.4)	19 (6.4)

自己実現を阻害している場合が多い。孤独感にとらわれず積極的に自己実現がなされるよう指導上じゅうぶん配慮がなされなければならない。	適応性	C o	わざとのけものにされたことがたびたびある	15 (12.1)	21 (122)	36 (122)
			人の親切には下心がありそうで不安である	16 (129)	4 (2.4)	20 (68)
2. 指導上の留意点 次の指導上の留意点は観察と検査結果の総合考察にもとづくもので年間指導計画立案の基本的指針として指導面にじゅうぶん生かされるよう考慮したい。とかく指導計画の立案には他校のものを参考として自校にあてはめたり、一般的傾向のみをとりあげる傾向があり独自性に欠けるが、自校生徒の実態に即した指導計画の立案こそ生徒指導の充実、機能化には欠かすことができない。(具体的な年間指導計画の立案は今後の研究課題としたい。)	向性(衝動性・活動性・主導性)	G	短い時間に沢山の仕事をする自信がある	5 (40)	9 (52)	14 (47)
			仕事は人よりずっと速い方である	14 (113)	12 (69)	26 (88)
			動作がきびきびしている	15 (12.1)	24 (14.0)	39 (132)
		R	いつも何か刺激を求める	10 (8.1)	10 (58)	20 (68)
			むずかしい問題を考えるのが好きである	19 (153)	26 (15.1)	45 (152)
		A	人中ではいつも後の方に引込んでいる	17 (137)	20 (116)	37 (125)
			会などの時は人の先に立って働く	11 (89)	22 (128)	33 (11.1)
			人のあつかいがうまい	13 (105)	16 (9.3)	29 (98)
めたり、一般的傾向のみをとりあげる傾向があり独自性に欠けるが、自校生徒の実態に即した指導計画の立案こそ生徒指導の充実、機能化には欠かすことができない。(具体的な年間指導計画の立案は今後の研究課題としたい。)		S	新しい友達はなかなかできない	16 (129)	37 (215)	53 (179)

(1) 自己概念の形成

不安定、不適応感(表1性格類型)の要因の一つとして「心配性である」(66.2%)「時々自分をつまらぬ人間だと思ふことがある」(62.2%)等自己の評価、認知の傾向に問題のあることが感じられる。これらは青年期における人格の統合的発達への一過程と把握することができるが、正しい自己認知にもとづく自己概念の形成は人格形成の基盤として考えなければならない。生徒指導の諸活動(特にホームルーム活動において)、また、全教育活動を通して概念形成が助長されるよう指導されなければならない。

(2) 活動性の育成

非活動性は基本的習慣形成の欠陥とみることもできるが、自分自身の行動に対して自信と責任が持てない自己不確実性によるものと考えたい。基本的な習慣形成とあわせてクラブ活動、生徒会活動等具体的な活動面を通して自信と責任感をか(ぬ)養い積極的に行動できるよう指導したい。

(3) 自律性（自己規制）の育成

質問項目別性格特性の「よく考えずに行動してしまう」（男 66.9%）「早合点の傾向がある」（男 63.7%）等衝動的傾向は欲求不満の多い青年期としては当然考えられる性格特性であるが、非行、問題行動と結びつく傾向が多いので指導上じゅうぶん配慮しなければならない。殊に、欲望の追求、感情的行動、非理性的行動は人間尊重の立場から厳に慎まなければならない。とかく青年期は心理的变化が激しく感情に走りやすい。そこに自己規制育成の必要性がある。校内外指導をとおして指導の強化を図り、積極的に理想や価値を追求するよう指導されなければならない。

(4) 自然な自己実現のかん（囀）養

「一人きりでいたいと思うことが時々ある」（51.0）等孤独感 は 自 己 の 心 の 世 界 に 目 を 向 けようとする成長段階の一過程で自然に見守ってやるのが大切であるが、不信性と結びついたり、自己逃避となる場合は自然な自己実現を阻害し人格形成をゆがめることが多い。ホームルーム活動、教育相談活動をとおして自然な自己実現が助長されるよう指導しなければならない。

(5) 男女の特性を生かす指導

男女それぞれの特性を生かす指導や男女交際の正しいあり方を機能的に指導することは生徒指導実践上極めてたいせつである。表 3、表 4 の 質 問 項 目 別 性 格 特 性 を 参 考 資 料 と し て 互 い の 短 所 を 補い、それぞれの長所をいっそう伸ばすよう指導していきたい。また、ホームルーム活動（H・Rにおける役割の分担と協力体制）、生徒会活動等をとおして男女相互の理解と信頼を深め、男女交際の正しいあり方、男女相互の協力的関係を有機化し、実践的に指導していかなければならない。

Ⅳ ま と め

生徒指導は非行対策、対症療法的指導であってはならない。教育目標達成の場として人格形成につとめ「個性の伸張」「可能性の開発」を目ざすものでなければならない。それには学校体制の確立が必要であり、全教師の共通理解を基盤とした、一貫した指導体制がとられなければならない。こうした指導体制の基本的指針を得るものとして指導上心理検査を活用することは有意義である。しかも、心理検査は生徒の実態把握に活用されるばかりでなく、心理検査本来の目的である個人理解の資料としてもその活用範囲は広い。しかし、専門家の中には、「心理検査の結果はまちまちであり、その信頼性や妥当性は不確実である」とその利用を危惧するむきもあるが、私はこの研究をとおして心理検査を生徒理解の補助的資料として活用することはじゅうぶん可能であると信ずる。たとえ、検査を心理療法の必須条件としてとりあげたり、結果を過信するようなことがあってはならない。また、使用に際しては、客観的な分析、検討が必要であり、心理検査の結果のみによって生徒の人間像を描写したり、独断的な先入観を抱くことのないようじゅうぶん注意しなければならない。